

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十一年四月十五日發行(毎月一回・十五日發行)

(通第七十三号)

慈

光

第七卷

第四號

目 次

- へだてとまこと……………花田正夫…(1)
- 願成就文講話……………福島政雄…(6)
- 歌心そのをりく……………柳瀬留治…(10)
- 黒獅子とバンダナ樹……………ジャーカータ物語…(13)

『へだて』と『まこと』

花 田 正 夫

私共の家庭生活はもとよりのこと、社会生活や、大きく国際関係に至るまで、何時も深刻ななやみとなるのが隔て心であります。

然し誰しも初めから相手を隔ててやらうなどといふ積りで交際する人は居ないけれど、煩惱具足の身、相對虚仮の心しか持ち合せのない、常に悪の方に負けて了ふ不完全で未通らない心しかない私共にしてみれば、事毎に是非善悪の闘争やら、愛憎痴慢の煩惱の跳梁するうちに、何時の程にか牢固として抜くことの出来ぬ隔て心の壁が出来て、そこから疑心暗鬼の魔手が無数に延びて、遂には自分で自分をどうすることも出来ぬ暗い冷い洞窟に落ちこんで了ふのであります。

二のつ隔て心

さてこの隔て心について二種に分けられます。

一つは『われよし』といふ独善の域に、高慢の壁をめぐらして、人を見下し、他をへたててやまぬ心であります。

華嚴經の入法界品に善財童子の求道物語がありますが、その最初に、文殊菩薩の前にぬかづいた童子が『三有を城廓と爲し 高慢を垣牆と爲し 諸趣を却敵と爲し 染愛を深壑と爲し 愚痴の闇に覆蔽せられ 三毒常に熾燃なり』と、自己の全体をそのまま打ち出して、菩薩の道への教を請うて居りますが、この垣牆とか深壑といふ言葉で、隔て心の棄て難く絶ち難いことに覚めて、そこに道を求めてやまぬ姿が見出されます。

二つには『われわろし』といふところに固着して、卑屈の泥沼に落ちこんで、こんな自分を相手にしてくれるものは何処にも居ないだらうと、相手を飽くまでも押しし隔てて行く心であります。

これについては涅槃經の梵行品に阿闍世王の救済が説かれてありますが、これが最もよい私共の手本であり先達であります。阿闍世王ははじめ『父は仇であり、母は賊である

』と怒り狂うたのでありますが、フとしたことから親心のまことに触れて、我身の大道に覚めて『斯く極悪人を救うて下さる神も仏もこの世にあらうはづがない。今にも自分は必ず地獄に墮ちる身である。それを思ふと夜も寝られず食物も喉を通らない。然もすでに地獄の華報が現れて全身から膿血が流れ、苦熱に迫られ悪臭を放つて、何人も見捨てて近づかない』と、枕頭に最後まで寄りそうて看護する母の章提希に訴へてゐる。章提希は黙々として苦熱を冷やし、膿血を洗ひ、薬を塗つて親切にいたはるけれど、すでに不幸の罪に立く阿闍世王には、それはいよく身を買められるばかりであります。そこには母に看病せられながらも、広い天地の間に淋しく只一人立つて悶へ苦しむといふ状態である。これこそ我身の罪業の重圧に崩折れて卑屈のドン底に沈みきつた惨怛たる姿であります。

衆水の海に入りて一味

高慢を城壁とした隔て心に覚めた善財童子は、仏陀の智慧をその体とせられる文殊菩薩に常に背後から照護せられつつ、所謂五十三の知識を歴訪するのであります。それは時に船頭や医師や国王を知識と仰ぎ、或は幼児や遊女や外道を拜し、遂には身近かな妃や母后に導かれ、最後に普賢菩薩の指南によつて浄土に往生して居ります。この求道の旅において、童子が心に描いた善知識と、眼前に現れる知

識とが非常な相違をしてゐてこれは悪魔ではあるまいかと驚き怖れて何度か退転しさうになるのであります。その都度、姿をかくして背後から護る文殊菩薩の念持の力が空中の声となつて響き、童子の抱く独善の邪見を破られ破られて圓滿大智の境界に導入せられて居ります。

次に阿闍世王の卑屈な心は、善友耆婆大臣の全身心を打ちこんでの悲引と、『阿闍世のために涅槃に入らず』との仏陀の大悲心に浴して遂に卑屈を脱して『如來は一切のために常に慈父母となり給へり。当に知るべし、一切の衆生は皆これ如來の子なり』との阿闍世王の讚歎の声は、久遠の親心の長時不断の照護に催されて、自然にひらかれた子供のうぶな慶びの叫びであります。

高慢による隔て心

『われよし』に立つて、油が水に浮ぶ如くに他を隔てるのも、『われわろし』に着して、暗い洞窟に身をひそめて世間を隔てるのも、一つ楯の両面の姿であります。前者を高慢と言ひ後者を卑下慢と呼ばれて居り、いづれも慢心の変形で、恰もそれはバンカラとハイカラが真反対の様で実人に認められたいと云ふ心根は同一であるのと同様であります。

先づこゝで高慢心、われよしといふ心のしこりに就いて考察いたしませう。この心のために自他共に傷つき害ねられて参りますことはまことに限りなくひどいことであります。日本はよい、支那と米國がけしからんと、われよしの心が爆発して戦争となり無数の犠牲者を出したのであります。この『我は他非』のこゝろこそ、家庭を乱し、社会を壊し、國際關係を破る根本の邪見であります。さうしたことは眼で見、耳に聞き、身体で経験しながら性こりもなく続き、また絶ち切ることの出来ぬのがこのわれよしといふ慢心であります。

歎異抄の著者は『まことに如來の御恩といふことをば沙汰なくして、我も人も善惡といふことをのみ申しあへり』と、牢として抜くことの出来ぬ、我は他非のやまぬ我身をも打ち出して、その上に『聖人の仰せには、善惡の二つ総じてもて存知せざるなり、その故は云々』との師聖人の教を渴仰して念仏に歸つて居ります。

親鸞聖人御自らは、生涯の御筆をさめとも申すべき、八十八歳の自然法爾章の末尾に『よしあしの文字をしらぬひとはみなまことのこゝろなりけるを

善惡の字しりがほは、大そらごとのかたちなり。

仇敵の間柄にもなりかねないのが人の世であります。

それにつけても私は最近盤珪禪師が繰り返し／＼と訓えられた言葉『起る念をほらふは、血で血を洗ふが如し。始の血はをちても、洗ふ血にてけがれず。いつまで洗うてもけがれはのかず云々』

の一句を思ひ浮べ、それと同時に歎異抄の『されば善きことも悪しきことも業報にさしまかせて偏に本願をたのみまゐらずればこそ他力にては候へ』の金句にひかれて念仏に歸されて居ります。

卑下慢の隔て心

次に『われわろし』にひつかかつて動きのとれぬ洞窟にうづくまゝ心について省みたいのでありますが、このことは私自身が長い間このどろんどろん路にあへぎ／＼のたうち廻つたので、全く我身につまされて深く感じるのであります。現今でもなほともすればその方に落ちこんでハット気付かされては、又してもお念仏にひきもどされるといふ始末であります。

さて自分は駄目だ、こんなことでは世間も相手にしてくれない、仏様も横を向かれるであらうと、我身をさげすみ人も仏も隔てて行くのであります。そして自分では、自分がほんたうにつまらぬからつまらぬ奴だと思つてゐる、ま

是非知らず、邪正もわかぬこの身なり

小慈小悲もなければ

名利に人師をこのむなり』

と御述懐なされて居ります。

又聖徳太子は、憲法第十條に『我れ必ずしも聖に非ず、彼れ必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是非のこゝろりなんぞ能く定むべけんや。相共に賢く愚かなること、みみがねの端無きが如し云々。我れひとり得たりと雖も衆に従ひて同じくおこなへ』と強くきびしく誠められて、われよしの我執我慢の心に大鉄鎚を加へて、打つて叩いて、その非なることを身に徹せしめずばおなじとの切々たる敵父の悲心を感じるのであります。

顧みますのに、不完全な人間同志が、共同生活をして行くに就いて、自分の缺点を棚に上げておいて、相手の短所ばかり責め立てて行くのであれば、世界の秩序は破れ闘争は続き、遂に破滅するほかに道はありません。是処に盲人が啞者の口となり耳となり、啞者が盲人の目となり杖となれば相寄り相扶けて生きて行くことが出来ませんが、その萬人わかりきつたことを実行するとなれば至難なので、何時も互の缺點を責め合ひ嘲り合うてばかり居るのであります。長年幸に親友として交つた者も、一朝利害相反すれば

たつまらぬ奴だから人も相手にしてくれないはづがないと、世を狭め人を疑ふのでありますが、もう一步この心を打ち割つて見ると、過去も現在も自分は取り柄がないばかりでなく罪惡の塊りである、然し何時かは立派になれるに相違ない、それが何時まで経つてもよくなれないからいかぬ／＼となつてゐるのであります。即ち未來の善人を夢みてそれに幻惑されきつてゐるのであります。恰もそれは昔は盛大にしてゐた人で今は零落した人達は何時も昔の夢を語り、今成功して昔わづかつた人達は、昔はどうでもよい、今が大切だと云つて現在を誇り、昔も今もうだつのあがらぬ人達は、やがて五年か十年すれば子供達が成人して未來はよくなれると未來の夢を追うて行くのと同じであります。橋慢な心は、過去現在の身に誇りを持ち、卑屈な人は未來の善人を常に夢みてゐるが、その夢が仲々実現されないで、困つた／＼、つまらぬ／＼と愚痴を流し人を隔ててゐるので、いはば、駄目と云ふボロギレで包んだ寶石の如く内心に深く未來の自己を肯定してゐるのであります。

然し一面また考へますと、溺れる者が藁を掴むに似て、過去にも現在にも誇ることのない者は、矢張り生命がけになつて未來の夢にでもしがみつかずには居られないのが、弱い人間の悲しい姿であります。

そこに聖人は愚禿鈔の中に『厭離穢土欣求淨土』は智者の道である、凡愚の身は『欣求淨土、厭離穢土』の順なり

ると申されてあります。譬へば子供がよく切れる双物を持つて喜び遊んでゐるとする。それは実にあぶなくてならない。然しその双物は危いから出せと云つても子供は渡さない、無理に引張るとかへつて手が切れるといふ時、唯一の方法は双物以上のよい玩具を見せて、双物を自然に捨てさせる外にない『欣浄』が先で『厭歳』があつたことになる、それが凡夫往生の大悲善巧の道である。聖人が信知して居られます。今この卑屈の心も、それをどうなれといふのではなく、そのどうにもなれぬことを知悉せられて、その者のための御真実心にふれる、そのまことを注ぎに注がれるといふことが、卑屈におちた私共に唯一無二の救ひの道となるのであります。

高野の明遍僧都が法然聖人の撰集を讀まれて始めは反對せられたけれども、機縁熟して「病者へのお粥」としての念仏を感じ得せられ、その後念仏を相統せられたのであります。心は散り乱れてどうすることも出来ないのを苦しめられて京都に聖人をたづねられた時、

『源空もちからをよび候はず。散れども名を称すれば仏の願力に乗じて往生すべしとこそこころえて候へ。ただ詮ずるところ、おほらかに念仏を申し候が第一の事にて候』と答へられると、僧都は『かう候。これうけたまはりに参りつるに候』

悲願をいよゝたのもしく随喜したことでありませう。

斯くて憍慢の心は大智に融かされ、卑屈の心は大悲にお

願成就文に就いて

その次に『十方恒砂の諸仏如来、皆共に無量寿仏の威神功徳の不可思議を讚歎し給ふ』十方恒砂でありますから、東西南北、四維上下と申しまして、八方に上と下とを加へて十方と云はれてありますが、その恒砂、ガンヂス河の砂の教程に沢山いらつしやる仏様が皆共に無量寿仏の威神功徳の不可思議なるを讚歎し給ふ。その無量寿仏の御威光、又は御功徳の何とも云へない不可思議さといふものがある。どうしてこの人がこの時目が覚めたのか、どうしてこの人がかう云ふ風にして信心が開けたか、それは不可思議である。それを十方の諸仏如来が共に讚めたたへたまふといふところである。

これはどうでありませうか。十方の諸仏如来とは私の感

と深く感動して退出せられました。僧都の退出の後に其座に居合せた人々に向はれて、

『欲界散地に生れたるものはみな散心あり。たとへば人界の生をうけたるもの目鼻のあるが如し。散心を捨てて往生せんといはん事そのことばりしかるべからず。散心ながら念仏申すものが往生すればこそ目出度き本願にてはあれ云々』

と重ねて聖人が仰せられて居ります。ここに自力作善のところがひるがへらされて、本願他力の意趣をいよゝたのもしく感佩せられたことでありませう。

歎異抄の九條に『念仏申しながらよろこぶ心もおろそかで、淨土に急ぎ参りたき心なき身』を打ちあけて、唯圓坊が老聖人にたづねまらせた時『親鸞もこの不審ありつるに唯圓坊おなじころにてありけり』と呼応同座せられたつ『しかるに仏かねて知ろし召して煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願は斯くの如きのわれらがためなりけり云々。久遠劫より流転せる苦惱の舊里はすてがたく、いまだ生れざる安養の淨土はこひしからず候ことまことによく、煩惱の興盛に候にこそ、名残り惜しく思へども娑婆の縁つきて力なくして終る時彼土へは参るべきなり。いそぎ淨土に参りたき心なき者を、ことに憐み給ふなり云々』と、我が御身にひきかけての御教化に、他力の

さめられて、念仏成仏せしめて下さるのであります。

昭和卅年春日、稿了す

福 島 政 雄

じでは、無量寿仏、阿彌陀仏のお声が、十方世界に満ち満ちて、十方の生きとし生けるものの心の上に反響して、生れとし生けるものから、その響きが出て来ると云ふ様な有様を云つてあるかと思ふのでありまして、その根本は阿彌陀仏のお声であります。その阿彌陀仏のお声がまことこの力として響いて来る、さうすると十方世界にその響が反響し渡る、それがこの十方恒砂の諸仏如来が皆共に無量寿仏の不可思議功徳を讚歎し給ふと云ふところでありまして、そしてそれが今度私の上に響いて来る。阿彌陀仏のお声が直接に念仏となつて私の方に響いて来るばかりでなく、一切の衆生のまことの響きといふものが、私のいのちに響いてまゐります。それでありませうから三河の国の方で御存

じでありませう、多田鼎先生のお書きになつたものを、若い頃に非常に感激して読んだものであります。多田先生は『この世の中はさうなつて来る』と讃仰の樂堂、仏の御徳を讃めたたへる音楽堂』の様なものになると云ふのは、この世の中は一切衆生の南無阿彌陀仏と稱へますその声は何とも云へない広大な、又莊嚴な音楽として、世の中に響き渡る、かういふお心持ちでありませう。それが私であれば私にひびいてまゐりますのであります。

これはも少し申しますならば、口に南無阿彌陀仏と稱へていらつしやらない方もこの世の中には沢山あります。けれどもさういふ方々を縁として私が仏のまことを感ずるといふことは始終ありますことでありますから、その場合にさうした方々の御縁の上に阿彌陀仏のまことの響きを私の心を感じますのであります。さうでありますから必ずしも南無阿彌陀仏を稱へておいでになる方々ばかりがさうなのではない、一切の衆生、一切の人々がその仏のまことを私に知らせて下さる御縁になつて下さる。もちつと切り込んで申せば、私を散々虐待したり悪口を云つたり、いぢめたりする人があるとします。けれども自分が虐待されながら悪く云はれながら、いぢめられながら、その御縁の内に自分が南無阿彌陀仏を感ずる、かういふ事は始終あります事であります。さうでありますから、つまり順逆共に、結局は、私の上に仏の御まことの響きであるところの南無阿彌

ひでないといふことと云ひ度いところでありますけれども、仏教の上では、哲学の上から深く高尚に世界の事を考へ、人間のことを考へる、それは結局は迷ひの世界である、ここまで仏教は徹底して來るのであります。だから迷ひの世界は、地獄、餓鬼、畜生から始めて、さういふところまで二十五かぞへてある。こんな世界があるんだなあと考へてゐるのは駄目であります。私には地獄の心もあれば、餓鬼の心も勿論あり、畜生の心もあれば、修羅、嫉妬の心もある、それから哲学の迷も私にはあるのであります。西洋の哲学もしきりに読んだりして、カントはどうであるの、プラトンはどうであるのと一角知つたが振りをして学校で講義をしてみる、併しこんなことやつてるのも皆迷ひだといはれてみると、さうなのか、学校で講義をして偉い顔であるんだが、これも迷ひなのか、自分の生命の動くところ、どこも迷ひならざるはなし、二十五の迷ひの世界は皆自分の世界である。その二十五といふ沢山の迷ひをわが身一身にそなへ持つてゐる衆生が私の事である、かうなりますから『諸有の衆生』とかう読めば私の事になるのであります。

その諸有の衆生が、『其の名号を聞き』と。このところを御講者の講釈を読んで居りますと『名号を聞き』と大經の文には出て居りますが、親鸞聖人はここを『本願のおいはれを聞いて』といふ意味に解釈しておいでになると、

陀仏がひびいてくるところの御縁になる、さういふ心持ちであります。『十方恒砂の諸仏如來皆共に無量壽仏の威神功徳の不可思議なるを讚歎し給ふ』といふその願成就のお言葉がさういふお心持ちで、私には結局うけ入れられる、我が身の上に感ぜられ、我が心の上にうなづかれるといふ事になつてまゐりますのであります。

その次が、これが第十八願の、願成就の文と云はれてあります所で、ごく大事なところと感ぜられますところであります。

『諸有の衆生』と今私が読みました。これは昔の御講者の御講義の本を読んでみますと、諸有のと云ふ読み方と、あらゆるといふ読み方と二通りに考へてみるがよい。あらゆる衆生と云へばこの世の中に生命を持つてゐるものは皆といふ意味になり、それから、諸有の衆生と読めば、諸有の有といふのは迷ひの意味であります。もろくの迷ひを持つてゐる衆生、これは仏教では迷ひの世界といふものを、二十五有に分けてゐる様であります。その二十五を一一御説明申し上げる力も私にはありませんし、又必要もないと思ひますが、たとへば、地獄、餓鬼、畜生、修羅、は二十五の迷ひの世界の一番にあけてある様であります。そのおしまひの方には、哲学なんかでものを深く考へる世界でも迷ひの世界である。哲学は立派な學問でありますから、迷

かういふことを云つて居られます。成る程、さうであります。本願のおいはれを聞けば、その名号を聞く、仏のみ名を聞くといふ事になります。本願のおいはれを聞くといふ事と、仏のみ名を聞くといふ事とが別々のことぢやない、お念仏申すといふ事は、本願のおいはれといふものを聞いて、そしてお念仏申すといふ事になつて來ると云ふわけでありますから、そこをあんまり六ヶ敷しく云はんでも、やつぱり上の卷にすうつと述べられてあります様な、本願の本末御いはれを我が身の上に聞いて、そして仏のみ名のひびきわたるのを聞く。それから聞くといふのは、親鸞聖人では『聞即信』といふ様な事を申されてあります。聞くといふ事が信すること、信するといふ事と、聞くといふ事とは一つになる、かう云ふ事を言つておいでになりますから、その名号を聞くといふ事は、仏のおまことを信する、本願の本末由來を聞いて信する、かう言ふ事になりますわけであります。

それで本願のおいはれを聞いて信するといふ事が、どこからたしかめると申しますと、やつぱり私自身が諸有の衆生であると、二十五の迷ひの世界を自分一身の上に具へてゐる衆生であるといふところから『聞其名号』その名号を聞く、本願のおいはれを聞いて成る程とうなづける、我が身の上にしみ渡る事になる。ここが仏教なのであります。何か御信心と云へば、自分は立派なものになつて、澄んだ

清い心になつてしまつて、これから別のものだとかう云ふ風によく考へられますが、さうでなくて、泥が出て、泥が出てたまらぬのであります。もう私などは六十も越えたから泥は出ないだらう、他の方はさう仰言います。さういふ白髪の様子ぢや人間も落ち着いたと思ふがどうかと仰言るのであります。さう云はれると一寸嬉しい様な気がするのであります。それは私の虚栄心でありませう。けれども本当の所を云へば矢つ張り泥が出て来るのであります。ある意味から云へば年を取つてくる程、泥が出て来る様であります。

どうも若い時には、二十前後の時には、これでも割合純であつた、と云ふのは、年取つて来ると、その煩惱が突にこまかに働く様になつてまゐります。さうでありますから一つの小説を讀んでみましてもさういふ事を感じますのであります。例へば島崎藤村さんの一番力を込めた小説が二つあるかと思ひますが、その一つ、お説みになつていられますせうか『家』、といふ小説がありますが、私が最初讀みました頃は、まだ三十代でありまして、その時に何に感じたのか、ベルリンまで持つて行つて讀んだのであります。その何に感じたかと申しますと、あの中に主人公の兄さんにあたる、家の大黒柱にならねばならぬ人が始終家をよそにして芸者と家を持つてゐたりしてゐる、散々に乱れてゐる。あ、いふ所を讀みまして、これはよそごとではない、

私は芸者と家を持たないが、五十歩百歩、似た様な有様であるといふことを感じまして、ベルリンで殆んど涙を流す様にして讀んだのであります。その時はそれ位の感じであります。今度は西洋から歸つて来まして、四十代も終りになつてからでありましたせうか、又これを讀んでみただけであります。今度は家の中の暗いこと、精神的苦しみを大分うつしてありますが、今度はその一つ一つが私の問題になつて来るのであります。ああ『家』といふものにかういふ苦しみがある、かういふ暗さがある、これは自分の問題である、かう云ふことになりまして、今度は一頁一頁を讀んでみると一頁一頁が何か自分に感ずるところがある、前に感じた時よりよつほど感ずるところがこまかになつて来たのであります。でありますから、人間といふものは年をとつて来ますと、一面では多少落ちついて来るのも本當でありませうが、一方では今の様でありまして、矢つ張り細かに煩惱の働き方が微妙になつてまゐります。さうでありますから、さういふ自分の姿といふものが見えて来るのであります。

五十六十となつてくると、自分のこの有様は悪いんだけれども、併しこれは誰でもあることだらうからと、かう云ふ私になつてくるのであります。そこに若ければ若いなりに、年寄れば年寄つて、煩惱といふものはなかなか絶えない、その煩惱の真唯中に、この本願のおいはれを聞く。御名号がひびくと、仏のまことと

云ふものは、さう云ふ煩惱だらけで、年寄つたからと云つて一向立派な心にもなれない、それだからなほ一層見捨てられぬ、見捨つるに見捨てられぬ、その汝の爲にと云ふ仏のまこと、この私にひびいてくると、身にしみて心になづかれる様になる。その味ひがこの『諸有の衆生、聞其名号』の味ひであると私は頂いて居ります。

歌心そのをりく

柳瀬留治

癖と個性

俗に無くて七癖といはれる位に癖は誰しも持つてゐるものである。これを習癖と熟し、又性癖といはれてゐる。習癖は生活習慣によつて成つた意をもち、性癖の性は生れつきの事、天賦の意が含まれてゐる。だが癖の大部分は日常の生活習慣による後天的のもので、幾分生理的體質に基く先天的な小部分がある位である。

個性は個人の特性の意で、久しく天賦とされてゐたが、これさへも生活環境によつて育まれ来た部分が極めて多い。世間に似たもの夫婦とよく言はれるが、それを考へても、本来のものが少く、協同生活中に影響し合つてのものが多分に見られる。日常の影響の証拠は、主婦をつくりの女中がよく見られる。電話では奥様と思つて話してゐると女中の場合がある。態度から声音までである。又貰つた子供で他人の判らぬ迄に親をつくりの性質、体つき、話ぶ

り、好き嫌ひを同じくするのをよく見受ける。血を分けた親に至つては殊に之が大きい、私など親の厭な処を全部承継いだ気がする。

個性は教育の上で、又芸術の上で尊長すべきもの、伸すべきものとし、唯一の価値的生命とされてゐる。だが個性らしく見られるものの中から癖を除くと特長といふべきものはたして何れ丈残るであらう。作品たる抒情詩、殊に散文、小説の上でそれが痛感される。自身を考へて見ても好悪とか己の癖、習性、それを除いて幾何の内容があらう

芸術の生命とするものは作者の個人的生命性である。更にいへば、個性を通じて永遠な人間性の真実に通ふ生命のそれである。個性とは作者の癖ではない。癖の脱けた性、いはば無個性の個性ともいはれよう。

これを宗教に置き換へていつて見よう。宗教に於いて救はるべきもの、解脱をねがふそれは何か、仏教ではこれを業といふ、宿業と呼び、我と呼ぶ、一般に罪悪とよばれるのはそれである。これは己の生活日常に悩み苦しんでゐる持前、屈托、執念といつた、いはば己の個性と見られるもの、それが家庭の和合、社会協同を害ねる。それが己の殆んど全部といつてよい。知性といはれ悟性といはれるもの

がないと單なる形而上学になり、善を求めぬ道徳倫理でも人間に行へぬ空なものになる。高度な生命性といつても、肉体生活を離れた精神的な生活は不可能である。肉体生活に基き乍ら高きに繋がりを持つといふに過ぎない。空を翔ける鳥も大地の育みがある為に生き、魚も水から引離れて生きられぬ如く、人間も肉体といふ水から引離れ、生命だけの生活が有り得ない。これはわかり切つたことである。

然し人間の生活といふものは、他の動物の如き肉体のそれに止まらない。精神生活といふものを持つてゐる。それが高きに連なるもので、神に連り仏に繋がる性質を持つ。私は肉体精神の両生活を引括めて、これを人間生活といふそしてその高きに指向するをいふ。

だから芸術に於いても、凡ての人情文芸や肉体芸術、官能唯美主義といつたものは芸術としては低い一面丈をクロゾアップしたもので、高き連りを持たないとされる所以であり、又主知主義、観念主義の芸、其他構成によつたりするものは、人間の精神機能だけを抽出し、之を大とし、之を弄した点、生活体である人間から遊離したものといふべきで、自然を忘れた文化の如く片輪者、人間としては不健康な病的なものといはねばならない。

すら、自我の理を整へずちを立てる。いはば我慾を完遂せんとする方法にすぎない。さうしたものの悉皆に、見切がつき脱け出る事が救ひであり解説である。己が脱し得さへすれば環境も運命も周辺の何物も問題でなくなる。そこに天眞爛漫、天衣無縫ともいはれる自然な己に帰れるのである。それは今、無個性の個性ともいふべきものである。ここに至つて己れ自身が知られる。己自身の底がわかるといふ事は生涯をかけての実に一大事なのである。これによつて眞の己が掴まれこれを表し得る。

短歌作品の最も生命性とされるものは、作者の姿、境涯さうしたものが調べとなり、味ひとなつて作の上に表はれるにある。癖や自我のあく、さうしたのから脱けたものが眞の己であり、眞の個性といふべきものである。

初学では、古典のよき、先輩の歌の風体、調べを学び身につけるにある。わが物にし、わが生命にした上は、消化吸収し己となつた以外は凡て捨て去る。そこに眞個の己、おのれに基づく独自の調べが出て来、初て個人的生命の特長が表される。昭和二十九年二月号、短歌草原。

人間生活の眞実ということ

芸術は人間性の眞実だといはれてゐる。「人間性」といふことが最大要件である。これは眞を求めぬ哲学でもそれを人間は食はねば生きられぬ体を持つもの、それでゐて高きを望む。そして強いもの、優れたのが勝つ。弱い者、劣つた者として、其儘では自滅するから何とかして生きねばならぬ。勝つた者として油断は大敵、不安におびやかされてゐる。貧乏人、富む人も同様、或は得た喜びも憂ひとなる、又得れば得るで更に欲しく、無きはただに悲しむ。それがおのれといふ「体と心と一塊の代物」、それは固さうに見えて脆い卵の如き人間、そこに喜び愛しむ反面につきぬ嘆きがある。そこにかうした現実の凡てを受入れて正容とする眞の宗教があり、又芸術があつて、その叫びを挙げて表現とする。

源氏物語にも『なま浮び』といふ言葉がある。仏によつて一寸の慰めを得てゐるのをかく呼ぶ。沈むに劣る浮びぎまである。いい加減の一次的慰めや心遣草では、人間性の眞実が満し得られ、解決される筈はない。芸術に於いてはそれは娛樂消閑の芸、玩弄の具とするもの、切実さのなきもの、第二芸術以下の、第三第四に墮ちる耻づく卑しむべきものである。

黒獅子とパンダナ樹

ジャータカ 物語

この物語はお釈迦様がローヒニーといふ河の岸にとどまつておいでになりました時、その辺りに住む一族の人々が常に争ひ合ふのを御覧になつて、深い御憐みのみ心から、この人々を前にして仰せになつたものであります。

それは遠い遙なる過去の世の事でありました。一人の大工が居て森から木を伐つて来ては馬車を作つて生計を立てゝをりました。

その時ヒマラヤの山にパンダナ樹といふ大木が生えてをりました。そして一匹の黒獅子が獲物をあさつてきては、何時もその樹の根元へ行つて横たはつて居りました。ところが或日、一陣の風が吹き起つてその大木を打ちましたので、一つの枝が落ちて来てこの黒獅子の肩に当り、その小枝が彼の肩を少し傷つけましたので彼はびつくりして飛び起き、跳び上つて四辺を見廻し、今来た方の路を眺めましたが何も見えません。…「俺の他に獅子も虎も自分の後を追ひかけて来る者は居ない。屹度この樹に棲んでゐる樹の主が自分がこゝに寝込むのをいやがつてこんな事をしたのに違ひない。よし、覚えてゐろ」…と彼は的外れの怒

とがあるものだ。獣が人間の言葉を話すなんて、未だ嘗て見た事も聞いたことも無い。此奴は屹度馬車を作るに恰好な材を知つてゐるんだナ。よししたすねてやらうと。

「お、獣の王獅子よ、お前は森から森へ、山から山へ歩き廻らぬ所はあるまい。さあ、わしに教へて呉れ。どの樹が車の輪を作るによからうか。堅い材を」

これを聞いた獅子は、いよ／＼自分の望みがうまく達せられそうだと独りほゝ笑みながら

「腕達者な大工さん、このパンダナ樹にまさる樹はありません。車の軸に、輪に、これ以上のものはありません」

と答へてニヤリとして立ち去つて行きました。大工はこれを聞いて大いに喜びました。

「い、日に森にはいつたものだ。獣が馬車に適した樹を教へて呉れるなんて、全く……」

そして早速その木を伐り始めました。そこで樹の主は考へました。…何も自分があの獅子の上に枝を落したのではない。だのに獅子は見当違ひの怒りにまかせてわしの住居をつぶさせようとしてゐる。さうすればこのわしも亡びてしまはねばならぬ。何とかうまい方便を設けてあの獅子を亡きものにしてしまはう……と。で彼は樵夫に身をやつてかの大工の前に行つて話しかけました。

「ヤア、お前さんい、樹を見付けたね。何を作りなさる」
「この樹で馬車を作らうと思ふんだよ」

りにかられて、パンダナ樹を打ち叩いてわめきました。

「やい、俺は貴様の樹にある葉一枚食つた事も、枝一本折つた事だつてないのだぞ。それに貴様は他の獣類が来ても我慢してゐて俺にだけは我慢出来ないといふのだナ。一体俺に何の過ちがあつたといふのだ。今に見ろ、貴様の木を根こそぎ引っこぬいてズタン／＼に切りきざんでやるから」

この様に樹の主を罵りおどかして去つて行きました。その時かの大工は車を曳いて馬車を作る材木を探しながらやつて来ました。そして車をおいて、手に鎗と斧を持つて適当な樹を物色しながら、丁度このパンダナ樹の近く迄やつて来ました。黒獅子はこれを見て「今こそ俺の敵に思ひ知らせてやらう」と呟いてその根元で待つて居りました。大工はあちこち眺めながら又遠のいて行きましたので、獅子は、彼奴の行かぬ内に話をつけなければ、と急いで呼びかけました。

「モシあなた、斧を手にしてこんなに森深くはいつて来てどんな樹を伐らうとして居られるのですか」

この言葉を聞いて大工は考へました。いや実に珍しいこ

「この樹で馬車が作れるつて誰におそはつたんだね」

「こゝにゐた黒獅子の奴さ」

「へえさうか、彼奴が教へたのか。とこであの黒獅子の喉の皮を破り取つて車の輪の縁に当てると、とても丈夫になるぜ。さうすればお前さんは大した財産を作れるよ」

「だがあの黒獅子の皮をどうして取つて来るんだい」

「何てお前さんは馬鹿者だらう。彼奴のとこへ行つて『お前の教へてくれた樹は何処から伐らうかね』と話しかけて連れて来るんだ。さうすれば彼奴はやつて来て、此処から切れ、と教へるだらうよ。その時、よく切れる大斧で息の根を止めてしまふんだ。そして皮は取る、い、肉は食べる。それから樹を伐りやい、のさ」

樹の主も亦、かくして復讐に邁進したのであります。

大工はこの言葉を聞いて、今日は何とい、日だらう、と大喜びで、黒獅子も殺し樹も伐り取つて立ち去りました。

お釈迦様は以上の物語りをなされて後、重ねてお言葉を

おつぎになり、
「かくしてパンダナ樹と獣王は互に怨み争うて遂に共に滅してしまつた。汝等こゝに共に和してあれ。ゆめ争うてはならぬ。和合を樂しみ、御法に立つ者こそ、必ず寂靜の境より退転する事は無いであらう。それは又諸仏の讚歎し給ふところである」とお諭しになりました。

編集後記

陽春再びめぐりきたり、花咲き鳥歌ふ好季となりました。各地に花祭の行事が賑やかに執り行はれて、こころはらくは仏光うららかに地を照すこととありませう。一道会館では福島先生をお迎へ申して、仏徳讃仰の一日を送りたいと予定して居ります。先生の御令息御入院以来お旅行が思ふにまかせられず、今回も久方振りの御縁を頂くこととであります。いづれ誌上で御講話を御報告いたしませう。

私共は何時までも生きてゐるかに錯覚して居りますが、一度の御縁も大変な條件が具備せねばならないことよと思ふことの叶はぬにつけ深く省みさせられます。それにつけても、一句一句が辞世の句よ、と告げた芭蕉翁の歩みは尊い存在であります。

▽願成就文の御講話は、福島先生が御身にかけて、仏心を仰いでいられ、その御導きで、私共の直上に照り添うて下さる大悲を感佩させて頂けるので、『光沢を蒙る』とあります浄土和讃の一句を文字通りに信味させて頂くこととあります。光沢とは、ひかり身にふひるが故に智慧の出でくるなり、と聖

人が和訓して下さつて居る微妙の味のある言葉であります。御住所は、東京都調布局区内、下仙川七九四番地です。最近の御書信では府中五七九五番地の桑田武夫氏宅で正信偈の講話を続けられます由でありました。御縁のある御方へ御照会申しておきます。時日は桑田様にお問ひ合せ下さい。

△歌心への折々は草原誌の冠頭言から柳瀬先生に頂いて居りますが、絶対信より流露する歌心のまことをひらき示して下さり、非常な啓発を被つて居ります。

最近親鸞聖人の七百年忌への呼び声がしきりに聞かれます。特に浄土の聖人が、偈文や和讃をもつて、浄土のまことといふことについて大きな暗示を頂いて居ります。經典にも大切なところは何時も偈文で繰り返されて居り、又肝要なところで大地が六種に震動し、天華雨降り、自然に天樂が奏せられると説かれてありますことも思ひ併せられます。東京都渋谷区代々木本町七三一番地が御住所です。△心付くまを省みさせて頂きましていて心付くまを省みさせて頂きまして。大智よく慢心を省き、大悲よく卑屈を洗ひ、無窮無辺の活動の中に常におさまられたるのさります。救ひの御手のそこにあひただ涙、清々禿居士 詠

御案内

毎月一、二、三、日曜午後一時半日曜講話。 一道会館

毎月廿四日午前、午後。 法話会。

昭和区小櫻町 教西寺

五月二十九日、日曜午前十時。岡崎市中町 東別院、同朋會館。 歎異鈔讃仰。

定価 一部 十七円(送共) 半年 百円(送共) 一年 二百円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ二八 編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二 印刷人 奥川 正生

名古屋市南区駄上町二ノ二八 発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番

光沢

慈光第七卷 第四号 昭和三十年四月十五日発行 (毎月一回十五日発行) 昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可